

■布田保之助 篤農家、事業家。膨大な事業を手掛け、荒地の白糸台地を灌漑する通潤橋を建設で、没後、神社に祭られた。

ふたやすのすけ

宣長没・・・1801＝

肥後国矢部手永で、_惣庄屋布田市平次の子に生まれる。

代々惣庄屋として矢部を治めてきた布田家であったが、その歴史は決して平坦なものではなく、矢部のある白糸台地は周囲を深い溪谷に囲まれていて水に乏しく、村人は先田の水どころか飲み水も足りないような深刻な水不足に悩まされ続けていた。

・・・1810＝9歳：この頃、_父が'矢部の民の夫役を少しでも軽減したい'との強い願いから、抗議の自害。

水野忠成老中1818＝17歳：

群書類従完結1819＝18歳：

_父の遺志を胸に刻んで、固い決意を持って、数々の施策を行って行き、

シボ^レ朴来日・1823＝22歳：_惣庄屋代役に抜擢される。

シボ^レ朴事件・1828＝27歳：

富籤流行・・・1830＝29歳：早くも、_開墾の功績で金子を受領。

鼠小僧磔・・・1832＝31歳：*惣庄屋に就任、

高島砲術・・・1834＝33歳：*全国的な天保の大飢饉に際し、手永では飢饉がなく褒美を受けた。

大塩平八郎乱1837＝36歳：

肥後藩内では加藤清正以来、土木事業が盛んであるが、藩の財政悪化で、細川重賢が宝暦の改革をして、地方に一定の権限と財源が与えられており、近代的な工事費の返還システムも制度化されていたことから、_惣庄屋代役以降、道路320カ所・新道の間敷28里・そのうち敷石21カ所・貫通2カ所・石橋2カ所・溝掘り1904間・往還の作り替え23カ所・村道の作り替え55里・眼鏡橋13橋・堤7カ所で堤水面合計2町4反18歩・井出延長間敷15181間・石積35カ所という、膨大な事業を手掛けて行くが、

阿部正弘首座1845＝44歳：

孝明天皇・・・1846＝45歳：

_白糸台地を何とかしなくてはと考えるうち、6km離れた笹原川から水を引き、白糸台地を取り囲む谷に橋を架け、その上に水路を通して送水することを思い付き、

万次郎帰国・1852＝51歳：_生涯の仕事の総決算として、阿蘇の外輪山のの五老ヶ滝川の谷に用水のための「通潤橋」の建設に着手。今までの業績で絶大な信用から、上役の郡代上妻半衛門とその上役の大奉行真野源之助の絶大な助力があり、石技術集団に九州各地の石橋の見学に行かせ、藩主も門外不出の熊本城の石組を見学させるなどして、

ペリー来航・1853＝52歳：

開国開港・・・1854＝53歳：

*逆サイフォンシステムを利用して通水する石造のアーチ橋「通潤橋」が完成。肥後の石工の技術レベルの高さを証明する歴史的農業土木構造物として、現在国の重要文化財に指定されている。初めて通水する日、矢部手永の会所代表で最高責任者として、死を覚悟して橋の上に正座したという。

安政大地震・1855＝54歳：

桜田門外変・1860＝59歳：

遣欧使節・・・1861＝60歳：

*隠居。島一葦と改名し、白糸台地の西南端の津留という比較的温暖な地区に住んで余生を過ごした。ここから度々、矢部手永の会所があった濱町まで遠く険しい道のりを歩いて通っていたという。

禁門の変・・・1864＝63歳：

周りの世話をする侍女や側近数名を伴い巡回していたと伝えられているが、地元に残る歴史書には、侍女は布田の愛人であったという話もあるが、死後、神格化されてきたので、このような話は公式な記録集には書かれていない。島一葦の名が示すように、本人の希望は、個人の売名や権威、神格化、蓄財などではなく、私心を捨て、矢部手永住民の協調と幸せを願うものであった。

大政奉還・・・1867＝66歳：

この年の工事報告書によると総費用は711貫で、藩主細川重賢が最初に参勤交代した時の大坂までの費用の800貫と同等であり、1両が10万円とすると14億7000万ということになる。

明治維新・・・1868＝67歳：

_藩主の細川氏から賞与を与えられ、

明治6年政変 1873＝72歳：_没した。